

2017年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

春日 由美
宮内 孝
古賀 隆一
金子 幸

はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターは、人間発達学部の開設とともに、2010年4月から大学の地域貢献と学生の学びを主たる目的に、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「リラ・フレッシュ」などの活動を行ってきた（春日ら、2017など）。子育て支援センター開設当初から「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」は毎年継続している活動である。「子育て支援室」は臨床心理士の資格を持つ学部教員1名が子どもや子育てに関する地域の方の心理相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育専門の学部教員1名と学生ボランティアによる、運動の苦手な子どもたちと保護者に運動遊びを体験してもらう活動である。「あそびの教室」は美術専門の学部教員1名と学生ボランティアによる、地域の子どもと保護者を対象にした工作遊びを体験してもらう活動である。そして2015年3月のトライアルの後、2015年5月より子育てひろば「みなみん」の活動を、非常勤保育士と学生ボランティア、そして複数教員が担当となり行っている。加えて2016年9月からは、障害のある子の保護者を対象とした心理サポート・グループ「リラ・フレッシュ」を学部教員1名（臨床心理士）と地域の子育てボランティアの方々と共に実施している。本報告では、2017年の「人間発達学部附属子育て支援センター」のそれぞれの活動について報告する。

1. 子育て支援室

子育て支援室では、これまでと同様に、子どもや子育てに関する地域の方の心理相談業務を行った。相談内容は、①子育てについて、②子ども自

身の問題について、③親子関係について、としている。子どもの年齢は限定せず、保護者のみの相談や、教員の相談も受けている。スタッフは本学部教員1名（臨床心理士）である。相談は完全予約制で、2017年は毎週月曜日の13時から17時に行った。受理面接の予約は、都城キャンパスの事務部で電話を受け、その後担当教員が申込みの受付をし、受理面接日を調整して行っている。

特別な広報活動は行っていないが、学校や行政、市の子育て支援センター等を介して、年間を通じ、新規の申し込みが入っている状態である（春日、2018）。継続中のケースや新規のケースにより、ほとんど予約は埋まっている状況である。昨年以前より継続のケースを含めた2017年1月～12月の面接日数は30日、面接回数は延べ75回であった。2017年の相談内容は、子どもの性格や行動等、子どもへの対応や育児不安、不登校などであった。相談を受けた子どもの年齢は幼児から10代後半まで幅広く、男子5名、女子14名の19名に関する相談を受けた。2017年1月から12月の詳細な相談業務に関する統計資料および今後の課題は別にまとめる（春日、2018）。

2. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」、そしてテレビゲームやコンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思い切り動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、2010年度より「チャレンジ運動教室」を開催した。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっており、その申込者はこの8年間で1,774名である。

保護者、子どものそれぞれのねらいは、次のとおりである。

- ・保護者…子どもと一緒に「運動遊び」を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を積極的に設定して、子どもの心身の発達を促そうとする態度を育てる。
- ・子ども…「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思い切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

(2) 平成29年度の教室の概要

- 1) 参加申込者：232名
 - ・幼児(5.6歳)とその保護者 61組
 - ・小学校1.2年生とその保護者 67組
- 2) 実施回数：12回
 - ・前期の部 5/27, 6/3, 6/17,
7/8, 7/22, 7/29. (6回)
 - ・後期の部 10/21, 11/4, 11/18,
12/9, 12/16, 12/26. (6回)
- 3) 教室の内容

幼児の部は、走る、跳ぶ、投げる、捕る、支える、回る等の基本的な動きを取り上げて、それぞれの動きの体の動かし方や動きの感じを身に付けるようにした。

小学校の部は、3年生時から学習する「かけっこ」「器械運動」「ボールゲーム」などの運動につながる動きを取り上げて、その動きができるようにした。

各部とも、親子でやさしい動きから難しい動きへと挑戦できるようなゲームを多く取り入れて、課題とする動きが身に付くように配慮した。
- 4) 子ども教育学科学生の参加者：のべ221名参加
宮内ゼミに所属する学生が、指導教員の指

導を受けながら指導内容を計画して実践した。また、本教室参加を希望する学生が、授業科目「子ども支援地域活動」の一環として、参加した。教室開始1時間前に、子どもへのかかわり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネージメントやつまづいている子どもへの支援を行わせた。教室終了時には、学生一人一人の反省や学びを話合う事後指導を行った。学生にとっては、保護者や子どもとのコミュニケーションのとり方、子どもの発育発達の違いや運動指導法などについて体験的に学ぶ機会となった。運動指導を行った宮内ゼミの学生にとっては、実践的な指導力向上を向上させる機会となった。

(3) 今後の課題

- 1) 学生による全体指導を行う機会を多く設けるなど、学生が計画し実践するような学生が主体的に運営する教室になるようにした。ここでの学生の学びを明らかにするとともに、教員としての資質・能力向上にどのように寄与しているかを検討する。
- 2) 参加者が多くなり、子ども一人一人の動きの変容の把握が、困難となっている。子どもの動きの変容を効率的に把握するための取組みを考えていきたい。

3. あそびの教室

(「創作ボールゲームを作って遊ぼう」)

地域の親子が参加できる活動として、昨年に引き続き「あそびの教室」第8回「創作ボールゲームを作ってあそぼう」を企画し、2017年10月28日(土)に開催した。この「あそびの教室」は、単に子どもを遊ばせるだけのイベントではなく、親子で活動に参加してもらうことで、①家に帰ってからも親子であそぶヒントになるような遊びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶことで、あそびによる成長と創造の楽しさや大切さを体験してもらうことを目的とした。また準備から当日まで、教員だけでなく学生も参加することで、学生のボランティア精神と創作教育につながるこ

も目的としている。以下、第8回の取り組みである、動物や昆虫、船や飛行機、樹木や家のダンボールによる遊具のあそびと「工作教室」について報告する。

(1) スタッフと準備

(a) **スタッフ** 人間発達学部の教職員5名と子ども教育学科1年生10名（中国からの留学生男女2名を含む）が参加した。この活動への学生の参加は授業科目「子ども支援地域活動」の一環でもある。

(b) **準備** 準備は6月から10月までの間の内8月中旬～9月の夏季休業を除きおよそ3カ月間である。教員と学生で、本館4階プレイルームと廊下を中心に、設置する段ボールと広告の紙で作った動く船や魚、樹木、子どもの家、動物（キリン、馬、犬、豚等）、昆虫（蟻、クワガタ、カブトムシ）、ゴジラ等の作品を配置した。図画工作室での工作はテーマとして犬やキリンといった特徴があって制作し易い工作を中心に、制作の提案を続けてきたが、今年は段ボールと広告紙と割箸によるボールゲーム制作を試みた。当日親やスタッフが見本や子どもが遊べるような作品等を、今年は主に課外の時間に修理補強を中心に整備した。動く玩具としてキャスターを取り付け、遊びの範囲を広げ、引き続きコンパクトリヤカーを遊具のベースに使った本格的な動くウルトラマン等の遊具を本館4階のプレイルームを中心に配置して子どものあそびの準備をした。また教員が広報（都城市や三股町の広報課に協力戴く）、傷害保険の手配、FAXでの参加者の受付を行った。

(2) 当日の活動

「あそびの教室」前日の2018年10月27日（金）に、1年の有志学生でひばり館から本館4階プレイルームと廊下に段ボール遊具の作品を搬入した。当日2018年10月28日（土）は、事前打ち合わせ等は8時から準備した。主活動は9時から12時（3時間）実施した。13時まで反省会と後片付けを終了した。参加者は幼児（5～6歳児を中心に3歳以上の未就学児）と小学生の親子5組、

計13名であった。工作の内容は①段ボールと広告紙と割箸によるボールゲーム制作、基本素材をあらかじめ学生と教員で作ったものを準備して作品のベースに使用する。②広告の紙を2倍に薄めた接着剤（ボンド）を使ってボールを作るシンプルな技法である。①②共に教員から説明を行い、学生ボランティアは主にあそびのパートナーとして活動し、教員が親子の工作を手伝った。時間短縮のために、ボール等の作品は、学生ボランティアの事前の制作協力に支えられた。

(3) アンケート結果と今後の課題

親へ協力をお願いしたアンケート結果では、「楽しかった」「ためになった」「また『あそびの教室』に来たい」は回答者全員が「はい」という意見であり、「家に帰ってから、やってみようと思う」と「子どものことで、これまで気がつかなかった発見があった」に関してはやや消極的の反応が一部にみられた。しかし子どもが自由に使えるダンボール遊具での遊びは、参加者には非日常の有意義な活動になったと思われる。今後親が子どものことに注目しやすくなるような配慮や工夫することを更に検討したい。また自由記述項目では、楽しかった、機会を増やして欲しい等の意見があった。また、今後も続けて欲しい、更に創造意欲が増したようだ、「幼時期にこのような遊びができるといいです」「自宅で空き箱や段ボールで我流の玩具などを作る子どもだが親としては置き場に困るが、後は子どもの気持ちを考えたい」「このような教室が頻繁に開催されると嬉しい」「いろいろ作ってみたいになりました」「出前講座のようなことをしていただけると図工の楽しさが伝わるのではないか」等の意見もあった。この他、子どもの自由画について質問があり、今後子どもの発達段階と子どもの絵について事前に話す機会の必要性があるのではと感じた。絵画と工作が心象表現で繋がっていることや、イメージを育てる工作の理念を理解していただく子育て支援の機会として捉えたい。

今年のテーマも初回より一貫して親子（幼児・児童）で関わる工作である。工作は大人が積極的にならないと幼児・児童の参加は難しい。ダンボー

ルや紙を使うのは幼児・児童の遊びで大切な安全を、中心に考えているからである。素材の紙から様々なアイデアやイメージを創りだすあそびが工作の意味であり、親が制作をしている姿を幼児が見ながら僅かでもお手伝い参加とあそびに興じる姿をイメージして企画している。工作は本来制作しているその時間が「楽しい遊び」であり安易に結果（作品の出来不出来や、出来栄え）を求めるべきではない。この活動は遊びを主体とした幼児・児童の参加に重きを置くもので、工作は親には頑張っている制作の姿を見せて欲しいと願うものである。今後の活動の要望も、幾つか新たな活動の提案もあり更に検討していきたい。昨年度から活動内容の課題、進行の方法などの問題点を克服する為に、短時間ながらオリエンテーションを行い、子どもの自由画表現やあそびとしての工作の本来あるべき姿を説明し、工作は完成を目的とするのではなくプロセスの大切さ、試行錯誤の重要性といった幼児造形教育の理論を参加された保護者の方に解説した。「手を創造的に使おう。失敗も制作である。」というのが更に継続目標である。

今回は「あそびの教室」の8回目であったが、活動の参考になることが数多くあり、更に次年度以降も少しずつ改善しながらよりよい活動を作り上げていきたいと考えている。

4. 子育てひろば「みなみん」

子ども教育学科附属子育て支援センターの取り組みの一環としてスタートした子育てひろば「みなみん」も今年度で3年目となった。地域の子育て家庭を支援すること、また、学生が乳幼児とその保護者とのかかわりを学ぶ機会を作ることを目的に、定期的な開催を実施している。3年目に入り、学生にも「みなみん」の活動への理解が深まり、より良い環境で子育て支援をしていこうと試行錯誤する姿も見られるようになり、参加する親子の様子から環境設定の工夫をし、取り組むようになった。今回は、2017年1月から12月までの活動について報告をする。

(1) 実施の概要

①実施回数：計20回（1月～12月）

開設当初から、原則月1～2回、毎月開催することを目標としている。隔週の火曜日を実施日と設定し、午前10時から12時までを開設時間とした。実施日の詳細は表1の通りである。

表1 月ごとの開催日

月	開催日
1月	17日、31日
2月	14日、28日
3月	7日、21日
4月	25日
5月	9日、23日
6月	13日、27日
7月	11日、25日
8月	22日
9月	12日、26日
10月	10日、24日
11月	14日、28日
12月	12日

②利用者数

1月から12月までの計20回の実施で、利用した保護者の人数は延べ335人、子どもの人数は延べ369人であった。

③参加学生数

参加学生については、前期はボランティアとして自主的参加の学生が主であった。後期に関しては、ボランティアの学生に加え、子育て家庭支援論受講の3年生が輪番で参加をした。1月から12月までの計20回の実施で、学生の参加人数は延べ181人であった。今年度は、時間割の関係で1年生の参加を促すことができなかった。今後は、曜日の設定等を工夫し、子ども教育学科の学生が積極的に参加できるように開催日程を計画していきたい。

④運営スタッフ

子育て支援センターのパート保育士であるYさん、4年生のAさん、Bさん、Cさんの3名を中心として準備、運営を行った。学部教員は、担当時間を割り当て参加し、学生へのアドバイスや保護者から相談があった場合には対応ができる体制をとった。

(2) 取り組みの実際

毎回、実施日の1週間前に参加学生が集まり、準備会を行った。準備会には子育て支援センターのパート保育士であるYさんにも加わっていた。学生へアドバイスをお願いした。準備会では、お楽しみ会の役割決めや手作りおもちゃの作成、既存のおもちゃの消毒、壁面構成等、実施日に向けての準備に取り組んだ。また、実施の案内・広報に関しては、行政（都城市・三股町）や近隣の子育て支援センター等にポスターを掲示、地域の情報誌に実施の様子を掲載等、様々な方法で地域住民への周知を行った。さらに、みなみんのTwitterを開設し、施設の写真や学生の準備会の様子などを掲載し、初めての人でも安心して参加ができるように心掛けた。

お楽しみ会では、パネルシアターやペープサート、からくり絵本の読み聞かせ（夢を叶える塾にて制作）、ダンス、わらべうた等、学生の趣向を凝らした内容で実施した。

実施当日は、学生は9時に集合し、環境構成、最終確認を全員で行った後、10時から12時までの親子の来館に臨んだ。開放している間の利用者の出入りは自由とした。その後、運営スタッフ、参加学生全員で反省会を実施し、次回の活動の参考にできるようにした。活動の流れは表2の通りである。

表2 活動内容

時間	内容
9:00～	学生集合 →環境構成（受け入れ準備、掃除等）、お楽しみ会のリハーサル
10:00～	親子の受け入れ →受付、子どもの名札を作成
11:30～	お楽しみ会 →パネルシアター、ペープサート、からくり絵本、わらべうた 等
12:00～	片付け
12:10～	一言反省会

3年目の取り組みとなり、学生の積極的な提案を基に運営を進めることができた。昨年の粘土

コーナーに加え、工作コーナーを設置し、制作物を持ち帰ることができるような制作を子どもと一緒に実施した。

(3) 今後の課題

子育てひろば「みなみん」も3年目の取り組みとなり、積極的に運営に携わりたいと申し出る学生が増え、今年度は3名の学生を中心に運営ができた。その結果、より定期的な開催ができるようになったが、4月、8月、12月に関しては、年度初めや長期休業期間であったこともあり、1回の開催となった。より身近な子育て支援施設として運営していくには、やはり、定期的な開催が必要である。地域子育て支援の意義を学生と共に考え、より良い子育て支援の在り方を模索していきたい。

5. リラ・フレッシュ

2016年9月より月1回の頻度で、障害のある子の保護者を対象とした心理サポート・グループ「リラ・フレッシュ」（リラックスとリフレッシュを合わせた造語）を行っている。この活動は、地域で子育てボランティア活動をされている2名の方と本学部教員1名（臨床心理士）が中心となり行っている活動である。現在は1時間程度、教員がファシリテーターとなり、参加された保護者（現在まですべて母親）が日頃気になること、人に聞きたいこと等を、子どもに関わることに限らず自由に話すピア・カウンセリング的な活動を行っている。保護者が話をしている間、子どもたちはベテランの子育てボランティアの方々に託児をしていただいている。

毎回、1～6名の方が参加しており、毎回参加している方もいる。各回の参加者数を表3に記す。話されている内容は、これまでの子育て、園や学校について、きょうだい児との関係、家族のこと、将来への不安等様々である。

このグループは、子どもの年齢が少しずつ異なる母親たちが集っている。これにより、これから子どもが入園や入学する母親が、先輩の母親からアドバイスを受けることができ、参加者にとって貴重な場になっているのではないかとと思われる。

表3. 2017年の月ごとの参加者数

月	人数
1	4
2	6
3	0
4	5
5	5
6	5
7	6
8	4
9	3
10	1
11	0
12	2

またこのグループに来ることを「楽しみ」と言われる母親が多い。参加している母親は、子どもが生まれて以来、子ども中心の毎日を送っている。そのような中、1か月に1時間だけ、子どもを託児をしてもらい、子どもと離れる時間を持つことは、1時間というほんの僅かな時間ではあるが、参加者にとっては得難い貴重な「自分のためだけの時間」になっていることが考えられる。

子どもの園の行事や病気と重なり、参加者が1名の回もあった。しかし逆に、「普段他の方がいた時は話しづらかったことが1人だったので話せた」などの感想も聞かれた。グループで話をすることのメリットもあるが、時折1名で話せる時間も作ることも有益ではないかと思われる。

まとめ

人間発達学部附属子育て支援センターの活動も本年度で8年目を迎える。はじめは教員、学生ともに試行錯誤で行ってきたそれぞれの活動が、現在は地域の子どもや保護者、園や学校関係者、行政からも一目置かれる活動に成長していると感じられる。このキャンパスのある地域には他に大学がなく、それぞれの活動は市民にとって得難い活動になっている。その中でも「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「みなみん」は、学生がボランティアとして参加し、学内にいながら子どもや

保護者と触れる機会になり、学生たちの学びの場にもなっている。また「子育て支援室」は無料で臨床心理の専門家のカウンセリングを受けることができる貴重な場となっている。これらの活動は、大学が多数ある都市部においては数多く行われているとも考えられるが、地域に大学が1つしかない本学が行うことの意義は大きいだろう。

一方でこれらの活動は未だ学外だけでなく、学内においても十分に認知されていない。今後は子育て支援センターの活動も、一学部の活動に留まらず、本学の有意義な地域貢献の一つとして、学内での認知もますます進んでいくことが期待される。

引用文献

- 春日由美・宮内孝・古賀隆一・金子幸 (2017) 2016年度人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 7, 131 - 136.
- 春日由美 (2018) 2017年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 8, 115 - 117.